

私的研究室の日常

データ工学

喜多尾憲助

kitaoken@aol.com

<筆者敬白> この前の編集会議で、「研究室だより」もほぼ一巡し、次回はどこの研究室にお願いしようか迷うようになった。そこで、リタイアした人でなお仕事にかかわっている方は、自宅の書斎を研究室として日々を送っておられるであろうから、「研究室」だよりを書いてもらえるのではないかということになり、小生から A さんに執筆を依頼することになった。しかし実のところ腹案があったわけでもなし、どのように説明するか迷ううちに、不義理もからんでなんとなく頼みにくくなった。そうこうしているうちに、締め切りの日も迫り、言い出しっぺの手前、自ら書く羽目になった。が、書き出してみると、核データに関係あることはほとんどなく、見本にもならない「近況」になってしまった。読者諸賢のご寛恕をお願いしたい。

株式会社データ工学（社長・大竹巖）の本店は東京・練馬にある。「社員」である小生は自宅のある千葉市、いうなれば(株)データ工学千葉支店で仕事をこなす。むろん助手や手伝いはいない。死んだら紙屑は全部放り出すなどと言明する「クサンチッペ」がいるだけである。作家などで、昔はホテルに立てこもって書きまくるなどという人もいたが、たいていは自宅が仕事場である。藤沢周平の書いたものに、怠惰なる生活（つまり創作活動）にメリハリをつけるため、「日程表」を作り、一日何枚などというノルマを課してはみたが、結局は、「日程表」以前の状態に戻りそうだ、という随筆がある。藤沢は業界新聞か何かの記者をやっている小説を書き始め、その後勤め人から作家家業に専念したのだが、かくいう小生も長年の務めを定年で辞め、自宅で店を広げている。その日常は、藤沢周平という直木賞作家と比べるとはまことに恐れ多いことであるが、似ているところがある。昼飯を食べると眠くなるのである。

小生の朝飯はほぼ 9 時前に終わる。起き抜けにパソコンのスイッチを入れるから、食事が済むや否や、仕事を始めることができる。ところが一、二時間すると眠くなる。今年の夏はここで一眠りをするのが半ば習慣になった。食事と食事の間隔は胃の負担を軽減するべく、適当に伸ばす。すると、昼食は 2 時頃になる。3 時というのも珍しくないが、どういうわけか昼食が終わって仕事に向かうと又眠くなる。居間のソファーがごろ寝の場所になる。食っちゃ寝、寝ては食う。何の事はない相撲部屋と同じで、このところやたらに腹が飛び出てきたのはそのせいかもしれないと思うようになってきた。周平先生は、低血圧で怠け者だから、午前中は新聞か何かを読んだりして能率が上がらな

いというが、高血圧気味の小生は、むしろ勤勉でパソコンと顔を合わせないと落ち着かない。もっとも、勤勉なのはパソコンの方で小生はビョーキにすぎないのかもしれない。

私の商売である評価済み核構造データファイル(ENSDF)の作成に関していえば、よほど大量のデータを扱わない限り、大型の計算機を必要としなくなった。私が自宅に入れたパソコン第一号は勤め先のものと同型のPC9800VXで、数値コプロセッサをはめ込んで使ったが、計算にずいぶん時間がかかった。内部転換係数や崩壊のft値を計算する場合は、一風呂浴びてもまだ終わらないという風であった。三代目にペンティアムを使った機種に変えたとともに、状況は一変した、データを打ち込んで、一呼吸おく間もなく計算が終了するようになった。しかしこうなると、それまでのように全体をプリントアウトし、じっくり眺め、修正を加えてから、計算させるということがなくなり、やたらに結果を画面に出し、その都度データを修正し再計算を繰り返すことになり、パソコンから離れられなくなったのである。パソコンに使われるというのはこういう事かもしれない。

この夏は、暑さのせいもあって仕事の能率はガタ落ちとなった。もちろん歳のせいもあるが、原因の半分は仕事場のせいにはしたい。わが家の居間には台所と仕事場が接している。仕事場といえば聞こえがよいが、仕事の出来る物置的空間にすぎない。居間から見て左手にこの空間があり、右手に台所がある。ともに居間からドアなしで出入りできる。ドアを付けなかったのは、今にしてみると失敗であったが、家を建てた当座は、こんな狭いところに扉を付けたら息が詰まってしまうと思ったからである。空間には作り付けの本棚があり、その一部に机も作り付けた。この本棚に対向して本箱があり、さらにパソコンデスクもある。椅子の動きもままならないし、出入りも体を横にしないと出ることが出来ない。飛び入りの仕事が入るとその上で書類を広げることになる。さほど広くない机は紙が重層を作るばかりか、一枚ものの書類などはその間に挟まれてしばしば行方不明になり、年から年中書類探しをやっている。

居間にはエアコンもあるが、盲腸のような空間にはあまり効かない。台所で換気扇を回していると、どこからか隙間風が入り襟元がスースーする。襟巻きは家の中での必需品である。今年の夏はやたらに暑く、扇風機も役に立たず、パソコンがダウンしてしまった。立上げにやけに時間がかかるなと思っているうちに、不良セクタありの警告が出てスキャンディスクが働きを修復するという動作を頻繁に繰り返すようになった。ハードディスクへのアクセスの頻度が増えると、ドライブの温度が上昇し、それがまた不良セクタの原因になるらしく、ほとんどが不良セクタになってしまった。メーカーに問い合わせると、ハードディスクを交換しなければならないが、同じものの在庫はない、市販のもので十分間にあうから自分でやれと言う。しかし当世、売られているのはたいてい数十GBのものばかり、3.1GBというような容量の小さいハードディスクは売っていない。やっと4.3GBのものを見つけた。どうせシステムを変えるならばと、Windows2000

にしたのだが、これがいけなかった。MS-DOS からは立ち上げられず、それ以前の OS がなければ導入できないのである。おまけに起動ディスクは別売りだという。壊れたハードディスクに OS がはいつていたのだから、まずそれをスレーブとしておいて新しいハードディスクに読み出せばよかったのだが、前日不燃ごみの回収日だったのでぱっと捨ててしまっていた。その上モニターまでつぶれる始末、これも修理するより買ったほうが安いといわれる。そんなこんなで 3 週間ほどは修復に追われてしまった。ウイルスじゃなかったのという人もいたが、とにかくパソコンに詳しい仲間が近くにいない「自営業」は大いに困ってしまうのである。

パソコンに向かっている視線を少しずらし、居間の方を見ると電話台があり、ソファがあり、その先にテレビがある。これがまた怠け心をさそう。老人はのどの渇きに鈍いから積極的に水分の補給に注意などといわれるものだから、しばしば仕事を中断し、台所へ行き冷蔵庫の麦茶を飲み、そのついでに、クサンチッペが見ているテレビと一緒に眺めるということになる。小生はドラマより、ドキュメンタリ、ドキュメンタリよりナマが好きである。要するにやじ馬なのだが、今年は、なんといってもニューヨークの大事件に尽きる。世界同時視聴の興奮はケネディ暗殺以来のことであり、忙しいんじゃないのといわれながらも、つい連日深夜まで同じ画面をべったり見ることになってしまった。

仕事を開始し少し脂がのってくると、運動不足になるから散歩に行こうと声がかかる。これも家庭円満、その上元気であることも亭主のお勤めであるから、よほどの事情がないかぎり断る理由が見つからない。「話を聞かない男」となって近くの遊歩道で、周りの樹木や草を眺めながら、小一時間ほどの散歩をする。家へ戻るとクサンチッペは「そろそろ睡魔におそわれるでしょ」と暗示をかける。昼寝なんかしてられないのだがなあ、とつぶやきながらもソファをみると横になってしまうのである。ときには、スーパーへ食料の買い出しのお供をさせられこともある。台所から居間以外の場所への移動は、仕事空間の前を通過することになるが、わがクサンチッペは通りすがりに、庭に小鳥がきていたりとか、何とかの花が咲いているとか、野良猫がご不浄を探しているとか、必ずしも返事を期待しないようだが、声をかけてゆくことがある。これによって「情けなや」わが集中力はたちまち破れてしまう。周平先生の書斎は二階にあるから、仕事に集中できるが、そんなこんなで、私はやはり深夜にならないと能率があがらない。悪いことに意外と深夜放送も結構面白いのである。そこで寝不足になり、昼寝を繰り返して、朝刊が配達されるころにならないと、寝付かれないということになっているのである。{完}